

アンビジャーナル

ENVIE Journal

01 秋冬号への想い

02 日本で出会えるフランス！

03-04 FRENCHBLOOM.NET

Qu'est-ce qu'une brasserie ?

05-06

Les classiques de la chanson française

07-08 FRENCHBLOOM.NET

映画『カミーユ、恋はふたたび』

Dig Deeper — 『枯葉』を聴きなおす

09-10

世界で活躍する日本人

13-15

MUSIQUE FRANÇAISE

16 FRENCHBLOOM.NET

マルシェ・ドゥーズェル：Marché de Noël

17 VIVE LE JAPON! ~日本全国見聞録~

18 FRENCHBLOOM.NET

フランスの町とお菓子(3)：Kougelhopf (クグロフ)

チョコカヌレ

Dans ENVIE il y a vie
希望の中に人生がある



Les classiques de la chanson française

～シャンソンを聞けばあなただけの映画が始まる～「バルバラ」編



皆さんはシャンソンという何を思い浮かべるだろうか。

シャンソンとはフランス語で「歌」という意味でジャンルを表すものではないのだが、日本では第二次大戦後に流行したフランス大衆歌謡を日本語に訳して歌われるものが「シャンソン」として広まったように思う。

色々な解釈や個人の意見があるので、ここでは私の見解を中心に素直に書くことを心がけたい。小学生の頃、将来はパリ・オペラ座のバレリーナになるという大きな夢を掲げて、練習に没頭しつつフランス語を学習し始めた。私が通っていたのは低学年からフランス語学習が義務付けられている変わった小学校だったので、映画・文学・哲学etc… フランス文化のありとあらゆるものに魅せられ、中学・高校もフランス語だけは真面目に学び、気付けば夢中になって大学までフランス文学を専攻して学び続けていた。

大学卒業後は音楽出版社に勤め、脱サラして音楽の道に進み、2013年フランスに武者修行に旅立つことになるのだが、そこで初めて「シャンソン」に出逢った。友人のおばあちゃんの家で聞いた「バルバラ」のレコードだ。

それまでは今時のフレンチポップスやフレンチヒップホップを好んで聞いていたのだが、「バルバラ」の歌を聞いてから一気にクラシックなフランス歌謡の虜になった。

滞在時に友人エレヌ・アルデンのイヴ・モンタンを題材にした一人舞台「Montand」を見てからは、この素晴らしいフランス音楽を日本にも伝えたいと情熱を燃やすようになった。

なんて粋で、なんて素直で、なんて詩的で、なんて美しいのだろう。

シャルル・トレネ、モーリス・シュパリエ、コラ・ヴォケール、エディット・ピアフ、ジャック・ブレル、イヴ・モンタン、シャルル・アズナブールetc…

素敵な歌手は挙げればキリがないのだが、バルバラはその中でも極めて特別な存在だ。

ずっと聞いていると自殺したくなる。こう表現すると色々物議を醸しそうだが私の素直な感想で、バルバラの歌を聞く度に自分の孤独と重なり、2倍にも3倍にも感情が膨れ上がって自分を支配し始める感覚に陥るのだが、最終的にバルバラの歌はその孤独に寄り添って抱きしめてくれるのだ。

私たちが知っているバルバラの曲は全て彼女自身による作詞作曲だ。

彼女の人生、実体験が全て注ぎ込まれている。彼女の死後、1998年に「Il était un piano noir…」(「一台の黒いピアノ」)という自伝書が発表された。その中に10歳半の時に父親から性的虐待を受けていたことを読み取れる文章がある。幼少期に受けたその恐怖と屈辱と常に戦っていたこと、長い間その気持ちが浄化することはなかったこと。

彼女の楽曲の中には「黒い鷲」のように、美しい歌詞の中にある得体の知れない浮遊感に不安を覚えることがあるのだが、恐らくこの出来事が背景にあるのだろうという説は多い。歌詞自体にしっかりしたクリアな意味がないのに聞いていると胸が苦しくなるのだ。

彼女を形成するものはそれだけではない。

その当時、ユダヤ人家庭に生まれた彼女が体験していた抗うことのできない「理不尽な出来事」への恐怖、怒り、悲しみは計り知れない。



色々想像するも、バルバラは多くを語らず全てを歌に込めることをスタイルとしてきた歌手だ。それがまた評価されている部分であると思う。

フランスにとってバルバラの成熟度は類まれなもので、同時代の歌手達がかわいらしい恋の歌を歌っていた時に、大人の女性が暴力的な社会でどう生きるかをしっかり見据え音楽に込めて活動していたのだ。

バルバラのように「Contradiction(矛盾)」を矛盾だと声をあげられる勇気のある人物は当時少なかったはずだ。

歌の内容がフィクションなのか真実なのかを語るのにはナンセンスでしかないので、このコーナーのサブタイトルは「シャンソンを聞けばあなただけの映画が始まる」にした。バルバラに限らず、あなたならどんな映像を思い浮かべながらシャンソンを聞くのだろう。きっとまた違う物語が何万通りもあって、ずっとずっと生き続けていくのだろう。

バルバラは生涯、定住する家を持たず全国を旅しながら歌を届けていたことも追記しておきたい。トレーラーに機材を積み、スタッフやミュージシャンと一緒にツアーを続けていた。そんなバルバラに今の自分を重ねてみてはすごく勇気をもらうのだ。

長い指で奏でるピアノの寂しげで力強い音
感情の奥底からこぼれる言葉、メロディ。

バルバラの歌はあなたの心が凍えそうな時、きっと抱きしめてくれるだろう。

Text by Mio Koseki



バルバラ関連映画 「バルバラ～セーヌの黒いバラ～」

配給/プロロードメディア・スタジオ

© 2017 - WAITING FOR CINEMA - GAUMONT - FRANCE 2 CINEMA - ALICELEO

監督・脚本

マチュー・アマリック

受賞・ノミネート

第70回カンヌ国際映画祭 ある視点部門詩的映画賞受賞

第43回セザール賞 主演女優賞・録音賞受賞

出演

ジャンヌ・バリバール バルバラ

マチュー・アマリック



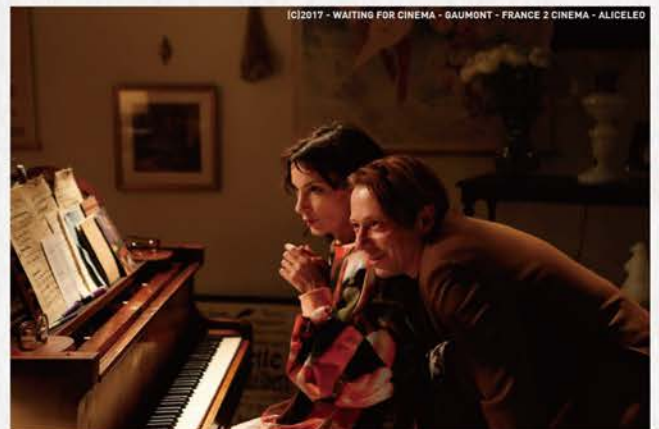
2018年11月16日から日本でも全国公開されたフランス映画「バルバラ～セーヌの黒いバラ～」は、バルバラの楽曲と合わせて観ておきたい。

10月17日に東京のアンステイテュ・フランセにて開催されたプレミアム上映会には主演のジャンヌ・バリバール氏も来日し、トークショーに登壇した。

映画の中では「バルバラに扮した映画の撮影を控えている女優 プリジット」を演じる。ん??とを感じる方も多いだろう。そう、この映画はただの伝記映画ではない。

バルバラの伝記映画を作る人たちを通して、色んな目線からバルバラを見て感じる事が出来る映画だ。ジャンヌ・バリバールの前夫であり監督・出演のマチュー・アマリックはヌーヴェル・ヴァーグの血をひいている。

音楽的にもストーリーにも、作り手みんなが可能性を制限せずに楽しんで作っていたとジャンヌ氏は語っていた。DVDの発売も待ち遠しい!



VOL.3
世界で活躍する日本人

私の周りには強烈な個性を放つ友人達が沢山いるのだが、今回ご紹介する彼もその一人。初めて会った時から柔らかな物腰と力強い言葉のコントラストが印象的だった。

普段はパリにいたのでなかなか会うことは出来ないのだが、2年前に東京で開催された2017 SSコレクション以来、先日大阪で開催されていた2019 SSコレクションで久しぶりに彼に再会することができた。

彼が創り出すデザインはいよいよ柔をもって剛を自在に操り、「RAYON DE SAFARI」(サファリの光)と名付けられた今季のコレクションテーマの通り、現代をサファリする我々に「どこへだって行けるよ!」という強さと勇気を与えてくれるようだった。

Text by Mio Koseki



おおうらんべい
デザイナー 大浦雲平

東京生まれ。東京造形大学卒業後、ベルギーのアントワープ王立芸術アカデミーに留学。2006年パリに移り、パターンナー養成学校A.I.C.P(Académie Internationale de Coupe de Paris)にてレディースパターンナー資格ディプロムを取得。以後数々のアトリエで修行を積んだ後、2013年、自身のブランド「CLOUD LOBBY」(クラウド・ロビー)を立ち上げる。

<http://www.umpei-ohura.com>

CLOUD LOBBYとは、日本人デザイナー大浦雲平がパリで立ち上げたファッションブランド。日本のブランドが海外進出をする例はあっても、ゼロから海外を拠点に作り続けているブランドというのは非常に少ない。海外で生活することも、仕事をするのも、ビザを取得することも、容易いことではないのは想像出来るだろう。実際に大浦さんも激動の人生を歩み続けて今に至るが、2015年、日本においてもフランスにおいてもセンセーショナルな事件は起きた。

2015年7月30日 フランス、パリ。

法曹界の最高峰、最高裁判所にて前代未聞のゲリラショーが開催された。日本人デザイナー、大浦雲平さんが自身のブランド「CLOUD LOBBY」のコレクションを、ビザ取得のために法廷弁護士ロマン・ブレ氏、彼に賛同するモデル、フォトグラファー、ヘア・メイク、スタイリスト、スタッフらとともに発表した。その衝撃的なニュースは翌日、ル・パリジャン紙、AFP通信などを通じて驚きを持って世界に伝えられ、多くの反響を集めた。これは日仏の行政機関をはじめ、芸術界における全てに訴えかける素晴らしい事件であり実験だったと思う。今もなお大浦さんの目の前には沢山の壁はあれど、その歩みは止まらない。時に壁をぶち壊し、時間をかけて乗り越える大浦さんのプロセスとCLOUD LOBBYという大浦さんのプロジェクトの行方を世界が注目しているのだ。



今季2019 SSコレクションのテーマは「RAYON DE SAFARI」(サファリの光)。LOOK BOOKの写真は、ナイトサファリツアーにインスパイアされたという。

光をパッと照らして現れる野生動物達を見た時のように、驚きと自由に満ちている。ディテールにはスーツケースやバッグのモチーフが取り入れられ、洋服を並べた時に発見する喜びも計算されている。

いつでもどこへでも旅に連れて行ってくれるコレクションだ。

CLOUD LOBBY

注目すべきは大浦さんならではの色彩感覚。私は勝手に「クラウド・ブルー」と名付けているが、CLOUD LOBBYの青は本当に絶妙で美しい。



大浦さんのブランドは日本とヨーロッパそれぞれの長所を併せ持つ。

ヨーロッパの高級メゾン同様に、デザイン、パターン、生地、裁断など、大浦さんは手仕事で行うことも大切にしている。

世界的にファストファッションが主流となってはいるが、大浦さんの作品達を見ていると人間のクリエイションの素晴らしさにただただ感動するばかりだ。



2018年11月に大阪で行われた展示会は美容院とのコラボレーション



ブランドを纏うということは、その創り手の哲学を纏うということ。

友人だからというのではなく、私はCLOUD LOBBYの哲学に心から共鳴する。

現在CLOUD LOBBYは日本の百貨店でのポップアップストアなどにも登場しはじめているので、是非最新情報はCLOUD LOBBYのH.PやSNSをチェックして欲しい。

大浦さんの今後の目標は、日本での展開はもちろん、今まで通りパリを拠点にヨーロッパ展開にも力を入れていくこと。

東京都からの支援プログラム「欧州デザイナーズプロジェクト2018」にも選出され、支援してもらうことによって可能性が広がると目を輝かせて語ってくれた。



MUSIQUE FRANÇAISE

このコーナーでは、おすすめフランス音楽や
来日フランス人アーティスト情報をお届けします。

Text by Mio Koseki

正真正銘のDISCO QUEEN



Corine (コリーヌ)

2017年のシャネルクルーズパーティーにも登場し、VOGUEなどの有名ファッション誌でも「Corineって誰? NEW DISCO QUEEN!」と話題になった。

初の来日ライブでは日本人のダンサー2名と共に、甘く実験的なDISCOサウンドとキッチュな世界観の圧倒的なパフォーマンスを繰り広げ、会場を一番湧かせていた。「私はあなたの地域の女の子」というのは彼女の代名詞であり、Instagramのアカウント名。親しみやすいあっけらかんとしたキャラクターと攻めたビジュアルのギャップも彼女の魅力のひとつだ。

超絶個性的なプロデューサーでありDJ/作曲家のDorion FiszelとMarc Collinと共に「ディスコ・フレンチ・ブギー」への愛を奏で、新しい世代と80年代ノスタルジックの両方で進化をし続けている。

Instagram @corine_fille_de_ta_region



1st Album「Un Air de fête」(2018年11月16日)

フォーク界の若き妖精



Pomme (ポム)

リヨン出身 22歳のアーティスト

彼女がギターを持つだけで、ハーブを持つだけでその存在感は計り知れない。

そして一度その声を聞いたら誰もが彼女に釘付けになるだろう。

「成長」と「失望」、「力」と「脆弱性」における矛盾が好きだと語る彼女の音楽はあたたかく官能的で宇宙を感じさせる。現在人気度急上昇中のアーティスト。

バルバラにも大きな影響を受けているという彼女は、音楽にも古典的要素をしっかりと継承しながら独自の世界観を創り出している。

ステージではギター弾き語りやバルバラの「Quel Joli Temps」も披露してくれた。

Instagram @pommeofficial



「オートハーブは心が綺麗な人が妖精じゃないと音が出ないの。私が妖精だってことね ふふ、」って言って曲を始めるポムちゃんにキュン。



1st Album「À peu près」(2017年10月)

2018年9月23日～24日に代官山 UNITで開催された
日仏音楽イベント **FESTIVAL TANDEM** に
来日していた3組をレポートと併せてご紹介!

アコースティック×ヒップホップ=♡



Sopico (ソピコ)

15歳からギターをはじめ、弾き語りで甘くフロウする新世代のラッパーSopicoは現在25歳。様々な移民/文化/コミュニティーが混在するパリの北側で育ってきた。街を歩いているだけでラップが聞こえてきそうなこの地区はフランスを代表するラッパー達を多く輩出している。彼がいつも制作活動しているDojoという名のスタジオで生まれた「Dojo Klan」というグループ、そしてサン・ドニにある「75e SESSION」というヒップホップグループにも属し、仲間達と日々作品を生み出しながら、ギターを片手にソロライブを精力的に行っている。

人気YouTube channelの「COLORS」にも登場し注目を集めた。

彼が独自で続けているYouTubeのSopico Unpluggedシリーズも是非見て欲しい。アコースティックギターとラップでメランコリーと希望をフロウする。

Instagram @sopicooo



1st Solo Album「YE」(2018年1月26日)

SPECIAL PICK UP

～特別篇～

Newcomer Artist



NAË (ナエ)

今回SOPICOのステージでは、ゲストシンガーの女の子とコラボしたパフォーマンスが何曲かあったのだが、その女の子の歌声が素晴らしくて、醸し出される雰囲気にもすっかり魅了されてしまった。

そのシンガーはNAËという名のエジプト×フランスのハーフの女の子。

14歳の頃からステージに立っているキャリアの持ち主で、ヒップホップやレゲエなど様々なジャンルのアーティスト達とのコラボレーションを続けてきたという。ステージの時もメイクはせず、天然のカーリーヘアをふわふわなびかせ自然体であることを好む彼女。バックステージでも可愛くてヤンチャで本当にキュートな人だった。

2018年末、満を持して初のEP「No Fears」をリリースした。この歌声は絶対惚れる!

新曲「Little Girl」や「No Fears」のvideoの公開もスタート!

Instagram @nae_music



1st EP「No Fears」(2018年12月14日)

FROM BACK STAGE !!

～取材オフショットをお届け～



SopicoとNAËちゃん、そしてこの日出会った日本で活躍するフランス人カメラマンAlan、Sopicoのプロジェクトで撮影しているビデオグラファーJules、同じくビデオグラファーのIssamと。「FESTIVAL TANDEM」はまさに日仏最大級の音楽イベントでした!



CorineとプロデューサーのDorion。打ち上げ会場でも、普段からこの二人はこの出で立ち。話し方も振る舞いも生粋のパリっ子で、ユーモアたっぷり! 今度日本でフレンチDISCOイベントしたいです!



Pommeちゃんとお台場のチームラボへ。無邪気にはしゃぐ彼女はプライベートでも眩しかった! ジブリ映画「千と千尋の神隠し」が大好きな彼女。また日本に戻ってくると約束してくれました!

SPECIAL GUEST

～番外編～



[FESTIVAL TANDEM]のスペシャルゲストはなんと! ゴダール映画のミュージック、女優で歌手のアンナ・カリーナ!!! 編集長小関、大学時代はひたすらゴダール映画に夢中になっておりました。

本誌「ENVIEジャーナル」の「ENVIE」も、アンナ・カリーナが主演した「気狂いピエロ」の劇中詞にインスパイアされています。

大好きな映画の中の好きなあの人を目の前に、時間が止まったかのようでした。

「気狂いピエロ」がフランスで初公開されたのは今から53年前。

今回は同時開催していた「永遠の『気狂いピエロ』展」にて当時のポスターやアートワークを見ることができました。

パソコンなどない時代に全て手書きで書かれたフォントや色彩、レイアウトのかわいさ!!

今年のカンヌ国際映画祭の大きなポスターも展示されていたのですが、嗚呼、どなたか1枚譲って頂けないものかしら(涙)



アンナさんは長い間公の場で歌うことはなかったそうなのですが、今回の来日イベントでは歌も披露してくれました。年齢を重ねても少女のように華麗なお方で、私はただただ感動で胸がいっぱいでした。

彼女の芸名はココ・シャネルが名付親というのは有名な話。

60年前、母国を出てフランスに来たばかりの当時17歳だった彼女にパリのカフェ・ドゥ・マゴで、ものすごいオーラのマダムが「お嬢さん、お名前なんなの?」と訪ねて来たという。本名を答えるとそのマダム(ココ・シャネル)は「あら違うわよ。あなたの名前はアンナ・カリーナ」と言って去っていったそう。 「アンナ・カリーナ」が誕生してから60年。今年77歳のアンナ様、3月には新しいアルバムもリリースしています!



Anna Karina
「Je suis une aventurière(邦題:冒険する私)」

ココ・シャネルが名付け親。ジャン=リュック・ゴダールそしてヌーヴェル・ヴァーグのミュージック(女神)で知られる女優・歌手であるアンナ・カリーナ。女優としての高い評価はもちろんのこと、シンガーとしてもミシェル・ブルランやセルジュ・ゲンズブール、カトリーヌなど名だたる作家を虜にし、数々の名曲をたくさん残してきました。2018年のカンヌ国際映画祭のメインビジュアルでは、ゴダール監督作「気狂いピエロ」より、アンナ・カリーナとジャン=ポール・ベルモンドがキスを交わすロマンチックな一場面が使われ、アンナ・カリーナ自身もカンヌで精力的に取材に応じる様子が報道され、大きな話題となりました。また、彼女の長年に渡る功績を讃え、フランス国からレジオンドヌール勲章が贈られ、授与式での変わらぬチャーミングさにも賞賛の声が上がりました。今なおファンを魅了して止まないアンナ・カリーナ。未発表曲や「アンジェラの歌」などレア曲も満載した、半生記とも呼べる究極のコンピレーション・アルバムの日本盤がついに発売。

アルバム制作を振り返るあるインタビューで「あなたはノスタルジックな人間ですか?」と記者に聞かれると、「私ってば、過去を振り返ってノスタルジーに浸る人間では全くないの。常に馬鹿みたいに幸せなの。」と目を輝かせるアンナさん。プロデューサーのローラン・バランドラは「『Je

suis une aventurière (私は冒険家なの)』っていつもアンナが言ってる言葉をそのままアルバムのタイトルにしました。」と語っています。来日イベント中に誕生日を迎えたアンナさん。おめでとうアンナさん! 日本に来てくれてありがとう!! また日本に来て下さいね!